

従来のカタカナ語はカステラやケーキのように外国から入ってきたものに使われてきた。しかし、最近は動作や状況までカタカナ語で表そうとする傾向が強まり、外国語に日本語が侵食されている感じを受ける。私は外来語の氾濫に憤りを覚え、日本語を守っていくべきであると訴えたいと思う。

カタカナ語の便利さと日本の国際化は関係があるという意見もある。しかし、私はカタカナ語と国際化は全く別のものであると考えている。国際化は自国の独自性を守りながら、他国のそれを受け入れることに意義がある。だから日本語を外国語化することは単に日本を世界の中に溶かし同化させているだけにすぎず、国際化とは違っている。

また、言語というのは民族の誇りであるはずだ。植民地時代を経験したさまざまな国では、民族が自分たちの言語を話すことの幸福がよくわかっているはずである。だから日本民族としての意識の低さが、外来語の氾濫を許しているといっても言いすぎではあるまい。外国語を含めた外国文化に侵食されることで、日本の文化や日本人としての生き方を忘れつつあるのかもしれない。日本人は自分たちに自信をもつことを苦手とする。もっと誇りをもってよいのではないか。例えば、漢字は一字でも意味が取れるという便利さをもつ。「独自性」といったとき、たとえその意味を知らなくても意味をある程度予測することが可能だ。しかし「アイデンティティ」ではどうか。言葉を知らなくては理解できない。私たちは日本語に誇りをもつべきではないか。

日本語が外国語とともに歩むことがあっても、氾濫させてはならない。国際化を目指す上でも二つを切り離して考えることが必要だ。日本人は自国の言葉を大切にすべきである。日本語が外国語に侵食され、次々とカタカナ語を使うようになったとき、日本文化もガタガタと音を立て崩れていくことになるだろう。

文章が読みにくいと感じるときがある。見直してみれば外来語が多い文章である場合がほとんどだ。

歴史上、外来語が日本語の中で果たしてきた役割は大きい。ベッドやテレビといった、元は日本になかった物を指す外来語はもう切り離すことができない。日常生活の中で切り離せない外来語はたくさんある。だから問題は外来語のよしあしではない。外来語の氾濫、つまり使い方に問題があるのではないだろうか。政治の世界での外来語の使われ方を考えたとき、必要性があつて外来語を使っているとはどうしても思えないときがある。外来語のもつ柔和性と曖昧さを逆手にとって、言葉や内容をうやむやにしているように感じるのだ。世間一般にあまり浸透していないとわかっている外来語を使うようなときには、怒りさえ覚える。

さらに昨今、外来語を多数出しているのは経済界のように感じる。市場が世界に広がっていく上で、市場で多くの英語が取り交わされているからだろう。そして世間一般の人々が抵抗を感じたり、よくわからないままにわかったような気になって接しているのが、このあたりの外来語だと思う。

それではどういう外来語の使われ方が理想的だろうか。

外国語が外来語になるとき、というのは「何か」を指すべき言葉が日本語になるときだろう。わざわざ電話をテレフォンと言ったり、鉛筆をペンシルと言ったりする人は少ない。だから外来語が生まれるときは新しい文化が入って来るときであり、本当に外来語を受け入れ、わかるということは言葉とともに入ってきた文化をわかるといふことだと思う。「外来語」として言葉ばかりが取りあげられるのではなく、言葉に伴うように意味も浸透していけば、外来語はこれまでのように日本語の中で大きな役割を果たし、血肉となって日本人の中に息づく独特の文化になるのではないだろうか。